

氏名 小林 弥那美

『愛のわざ』に示されているキルケゴールの愛の理論は、隣人愛（アガペー）隣人愛の伝統的な内容を典型的に表しているとされている。他者の相違に依らず、すべての人を平等に愛すること。自己愛を捨て、自己犠牲によって隣人に尽くすこと。これらとはたしかに、隣人愛の中に伝統的に見出される特徴である。キルケゴールはこの隣人愛の平等性と自己犠牲を、恋愛や友情（偏愛）と鋭く対比させることによって描き出している。

そんなキルケゴールの愛の理論は、キルケゴール研究においても彼の倫理的側面を示すものとして重要である。キルケゴールの思想は、普遍的なものに解消されない単独者や実存を強調するがゆえに、しばしば非社会的個人主義であるとして批判されることがある。これに対して研究者たちは、キルケゴールの愛の理論が彼の思想における他者の存在意義を示す証左になると考えてきたのである。

一方で、キルケゴールの愛の理論はむしろ他者の存在を無意味なものとしていると批判されることもある。他者の相違を度外視するなら、愛の対象としての他者は無意味なものとなっているのではないか。見返りの愛を求めない無私愛は、他者の応答に関心を持たないがゆえに、愛する主体としての他者を無価値なものとしているのではないか。このような批判に対して、キルケゴール研究者は『愛のわざ』の倫理的側面を強調することで反論してきたが、それによってむしろ、隣人愛を倫理的態度に過ぎないものへと狭めてしまっているとして、昨今議論が巻き起こっている。

このような問題に対して本論は、平等と自己否定ではなく永遠性を中心に据えた解釈を示すことによって答えたいと思う。主張するテーゼは以下の三つである。

(1) キルケゴールの隣人愛は、他者を相対的特徴（差異性）によってではなく、その人が「その人」として存在していること（固有性）に基づいて愛するものである。他者の固有性を無視し抽象的な「人類」として愛することは、隣人愛ではない。したがってキルケゴールは、愛する対象としての他者も、愛する主体としての他者も重視している。

(2) キルケゴールの隣人愛はたんにすべての人に対する倫理的配慮を意味するものではなく、すべての人の存在を喜ぶという美的要素を内に含んでいる。隣人愛は、神がすべての人間に固有性を与えてくださったことを感謝し、他者の固有性を神の愛の証左として喜ぶものである。なぜなら、彼や彼女が「その人」として存在しているのは、神の愛によるものだからである。恋愛や友情の喜びも、恋人や友人と惹かれ合うような固有性を与えてくれた神への愛と感謝の中に位置づけられる。

(3) キルケゴールの愛の理論が最も重視しているのは、神の前の平等と愛の永遠性である。したがって、この世における倫理的な同等配慮の実現を直接的に目指すものではない。しかし、人間同士の相互関係における根本的な不平等を浮き彫りにすることで、互惠主義的な相互愛の問題点に光を当てるものとなる。

以上の三点を論証するために、本論ではまず、第一章で隣人愛（アガペー）に関する神学的・倫理的議論の流れを整理する。つづく第二章では、キルケゴールの愛の理論に関する研究状況を概観し、『愛のわざ』を解釈する上で大きく二つの問題があることを示す。第三章から第五章までは、愛する対象としての他者の意義を明らかにするために、隣人愛と恋愛・友情の両立可能性をめぐり問題に取り組む、隣人愛が他者の固有性を愛するものであることを示す。あわせて、キルケゴールにとっての平等

が、「すべての人を等しく倫理的に配慮すること（同等配慮）」ではなく、「全ての人が神のみに依存し、人間同士のあらゆる依存関係が解消されていること」を意味していることを明らかにする。第六章では、愛する主体としての他者の意義をめぐって、隣人愛と相互愛の関係について分析する。そこで、キルケゴールが相互愛を拒否することによって、むしろ主体としての他者を重視していることを明らかにする。最後に、第七章では隣人愛の非政治性に触れる。非政治性は、キルケゴールの愛の理論が永遠性を追求するがゆえに、不可避免的に生じるものである。そこに彼の愛の理論の限界があることを認めつつも、キルケゴールの隣人愛は現代の人間関係をめぐる倫理的課題に寄与するものであることを示す。以上の分析をもとに、キルケゴールの愛の理論を隣人愛に関する倫理的・神学的議論の中に位置づけ、その独自性を示すことによって結論とする。